

# The 19th Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP)

**Kyoto**  
**February 14<sup>th</sup>-16<sup>th</sup>, 2020**



Japan Young Psychiatrists Organization  
認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会

 大日本住友製薬

発売準備中

抗精神病薬 / 双極性障害のうつ症状治療薬 薬価基準未収載



**ラツータ錠** 20mg 60mg  
40mg 80mg

**Latuda® tablets** ルラシドン塩酸塩錠

劇薬・処方箋医薬品 (注意—医師等の処方箋により使用すること)

※「効能又は効果」、「用法及び用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。

製造販売元 (文献請求先及び問い合わせ先)

**大日本住友製薬株式会社**

〒541-0045 大阪市中央区道修町 2-6-8

〈製品に関するお問い合わせ先〉

くすり情報センター

**TEL 0120-034-389**

受付時間 / 月～金 9:00～17:30 (祝・祭日を除く)

<https://ds-pharma.jp/>

2020.3作成



障害や発達の遅れが気になるお子さまから  
就職したい障害のある方まで、切れ目のない支援を提供

# ウェルビー株式会社

「すべての人が「希望」を持てる社会の実現に向けて」、  
医療機関・行政・支援機関・ご家族などと連携して  
一人ひとりに合わせた個別支援・集団支援を提供しております

就労移行支援「ウェルビー」



ウェルビーのサポート・カリキュラム例

18歳以上 65歳未満の就職したい障害のある方が対象

※障害者手帳がない方でも、自立支援医療等と同様の基準でサービスを受けることが可能

蓄積した実績とノウハウを基に「自分らしく長く働き続けること」をサポートします



ビジネスマナー講座、  
コミュニケーション訓練、  
就労訓練（PC、軽作業 など）



就職活動サポート、  
面接同行、職場実習 など



就職後の定着支援

累計就職者数 **3386**名 (2020年4月現在) 半年定着率 **90%** (2019年10月～  
2020年9月就職者)

放課後等デイサービス「ハッピープラス」



ハッピープラスのサポート・カリキュラム例

小学生・中学生・高校生の発達障害・発達の遅れが気になるお子さまが対象

※障害者手帳の有無は問わず支援が必要と認められたお子さまも対象

入学や卒業など生活環境の変化に合わせて、成功体験を積み重ね、個性に応じた成長を支援します



コミュニケーションスキル  
ライフスキル  
(身辺自立・金銭管理 など)



学習スキル  
(言葉の読み書き・計算・  
学校宿題・プログラミング など)



就労スキル  
(社会に出て働くための  
経験と知識 など)

児童発達支援「ハッピー」



ハッピーのサポート・カリキュラム例

0歳から6歳まで（未就学）の発達障害・発達の遅れが気になるお子さまが対象

※障害者手帳の有無は問わず支援が必要と認められたお子さまも対象

「あそび」を通してお子さまの発育を助け、本人の興味を最大限に引き出します



集中力や感性を養うあそび  
体力や体幹を鍛えるあそび  
(リトミック、リズム体操 など)



やり取りを楽しむあそび  
社会性を育むあそび  
(感情のコントロール、SST など)



小学校入学に向けて  
(ひらがな・ライフスキル など)

就労移行支援：73拠点 / 就労定着支援：61拠点 /  
特定相談支援：3拠点 / 自立訓練（生活訓練）：1拠点 /  
児童発達支援：24拠点 / 放課後等デイサービス：9拠点  
(2020年4月現在 仮オープン含む)

この他、多様なカリキュラムやイベント、状況に  
応じたオンライン対応などをご用意しております。  
特性やご希望に合わせた最適な支援をご提案いた  
します。詳細はお問い合わせください。

【ハッピー／ハッピープラス】

☎0120-655-244

受付時間 9:00～18:00(年末年始除く)

ハッピー



ハッピープラス



【ウェルビー】

☎0120-655-773

受付時間 9:00～18:00(年末年始除く)

ウェルビー





## Better Health, Brighter Future

タケダから、世界中の人々へ。  
より健やかで輝かしい明日を。

一人でも多くの人に、かけがえない人生をより健やかに過ごしてほしい。タケダは、そんな想いのもと、1781年の創業以来、革新的な医薬品の創出を通じて社会とともに歩み続けてきました。

私たちは今、世界のさまざまな国や地域で、予防から支援活動にわたる多様な医療ニーズと向き合っています。その一つひとつに答えていくことが、私たちの新たな使命。よりよい医薬品を待ち望んでいる人々に、少しでも早くお届けする。それが、いつまでも変わらない私たちの信念。

世界中の英知を集めて、タケダはこれからも全力で、医療の未来を切り拓いていきます。

武田薬品工業株式会社  
[www.takeda.com/jp](http://www.takeda.com/jp)



# The 19th Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP)

Time table of program	4
講師・アドバイザー・オブザーバー一覧	5
参加者一覧	6
はじめに	7
Introduction of JYPO	8
Introduction of Participants	13
How to make a presentation	
横浜市立大学附属病院 市民総合医療センター児童精神科 青山 久美先生	15
Oral Presentation Sessions	17
Meet the Expert	
慶応義塾大学医学部精神 神経科学教室 専任講師 岸本 泰士郎先生	19
Small Group Work (Day1-Day3) : How can you shorten the length of hospitalization of patients with schizophrenia?	21
Online session with Prof. Sartorius	
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP)	
代表 Norman Sartorius先生	27
Poster session and mini-lecture : How to make a poster	
The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP) 代表 Norman Sartorius先生	
メンタルコンパス株式会社 代表取締役 伊井 俊貴先生	29
Special Session : My Career and CADP	
大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 藤本 美智子先生	
メンタルコンパス株式会社 伊井 俊貴先生	
横浜市立大学附属病院 市民総合医療センター児童精神科 青山 久美先生	31
How to be elected	
横浜市立大学附属病院 市民総合医療センター児童精神科 青山 久美先生	34
Farewell Session : "Go-en Project 2020"	36
Evaluation of the 19th CADP and Future Prospects for the 20th	38
Remarks from the overseas participants	
Department of Psychiatry, Medical University of Warsaw Aneta Michalska先生	40
Bangkok Mental Health and Rehabilitation Center, Bangkok Hospital Athicha Eakamornpan 先生	40
Saint-Luc University Hospital & La Petite Maison ACIS Camille Noël先生	41
Clenia Littenheid AG Michael Wallies先生	42
Faculty of Medicine Siriraj Hospital, Mahidol University Natee Viraban 先生	42
19th CADP Best Presenter Awards	00
20th CADPのご案内	00
JYPO参加募集案内	00
正会員入会申込書	00
協賛・19th CADP運営委員	00

# Timetable of program

## Day 1 Facilitated by Dr. Yuto Satake

Time	February 14th (Fri.)
9:00-9:30	Registration
9:30-9:45	1. Opening Remarks and Description of the Course Introduction of CADP, General Information Dr. Morio Aki
9:45-10:00	2. Introduction of JYPO Dr. Nozomu Oya
10:00-11:30	3. Introduction of Participants Dr. Kumi Aoyama
11:30-12:30	Lunch
12:30-13:00	4. Lecture: How to Make a Presentation Dr. Kumi Aoyama
13:00-13:15	Break
13:15-14:30	5. Oral Presentation A Chaired by Dr. Masato Masuda Speakers : Dr. Naohiko Toshino, Dr. Akiko Iba, Dr. Katherine Tan, and Dr. Hiroshi Imagawa
14:30-14:45	Break
14:45-15:45	6. Oral Presentation B Chaired by Dr. Izumi Kuramochi Speakers : Dr. Ayako Okuma, Dr. Tomokazu Iemura, Dr. Athicha Eakamornpan, and Dr. Junko Kitaoka
15:45-16:45	7. Small Group Work Day 1 Chaired by SGW Committee
16:45-17:00	Break
17:00-18:00	8. Meet the Expert Prof. Taishiro Kishimoto
18:15-18:45	9. Online Session with Prof. Norman Sartorius
18:45-19:00	Photography
19:00-21:00	Reception Dinner

## Day 2 Facilitated by Dr. Morio Aki

Time	February 15th (Sat.)
9:15-10:15	10. Oral Presentation C Chaired by Dr. Camille Noel Speakers : Dr. Frilya Rachma Putri, Dr. Fuyuki Koizumi, and Dr. Aneta Michalska
10:15-10:30	Break
10:30-11:30	11. Oral Presentation D Chaired by Dr. Shou Fukushima Speakers : Dr. Haruka Ogawa, Dr. Natee Viravan, Dr. Arisa Nishimura, and Dr. Ryo Asada
11:30-11:45	Break
11:45-12:45	12. Oral Presentation E Chaired by Dr. Yasunari Yamaguchi Speakers : Dr. Michael Wallies, Dr. Chikara Nakayama, and Dr. Haruko Nakano
12:45-14:00	Lunch / Poster Evaluation
14:00-15:30	13. Small Group Work Day 2 Chaired by SGW committee
15:30-16:00	Break / Photography
16:00-17:30	14. Poster Session and Mini Lecture: How to Make a Poster Dr. Toshitaka Ii, Prof. Norman Sartorius
17:30-17:45	Break
17:45-18:30	15. Special Session: "My Career and CADP" Dr. Kumi Aoyama, Dr. Michiko Fujimoto, and Dr. Toshitaka Ii
18:30-18:40	Break
18:40-19:20	16. Online Session with Prof. Norman Sartorius
19:30-21:30	Reception Dinner

## Day 3 Facilitated by Dr. Akihisa Iriki

Time	February 16th (Sun.)
9:15-9:45	17. Lecture: "How to Be Elected" Dr. Kumi Aoyama
9:45-11:15	18. Small Group Work Day 3 Chaired by SGW committee
11:15-11:30	Break
11:30-12:00	19. Farewell Session "Go-en Project 2020" Dr. Morio Aki
12:00-13:00	20. Farewell Remarks & Certification
13:15-14:45	21. Lunch time / CADP Evaluation
17:00-19:00	Farewell Party <Option>

# 顧問・講師・アドバイザー・一覧

## ■ 顧問

Norman Sartorius

The association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP) 代表

佐藤 光源

東北大学 名誉教授

## ■ 特別講師

岸本 泰士郎

慶応義塾大学 医学部精神・神経科学教室 専任講師

青山 久美

横浜市立大学附属病院市民総合医療センター  
精神医療センター 助教

伊井 俊貴

メンタルコンパス株式会社 代表取締役

## ■ アドバイザー

田中 増郎

公益財団法人慈圭会 慈圭病院

小林 清樹

心優会 中江病院

藤本 美智子

大阪大学大学院医学系研究科  
情報統合医学講座 精神医学

長 徹二

一般社団法人信貴山病院 ハートランドしぎさん  
臨床教育センター

堀之内 徹

北海道大学大学院医学院 神経病態学講座精神医学教室

吉田 和史

京都大学大学院医学研究科  
健康増進・行動学分野

大矢 希

京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学

福島 弘之

医療法人 桜花会 醍醐病院

所属等は2020年2月時点のものです。(敬称略)



# 参加者一覧

## ■国内参加者

### 【委員長】

安藝 森央  
公立豊岡病院組合立 豊岡病院

### 【副委員長】

入來 晃久  
大阪精神医療センター

佐竹 祐人  
大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室

### 【4回目】

角 幸頼  
滋賀医科大学 精神医学講座

河岸 嶺将  
千葉県精神科医療センター

### 【3回目】

福嶋 翔  
厚生会 道ノ尾病院

出利葉 健太  
札幌医科大学 神経精神医学講座

中野 心介  
医療法人社団新光会 不知火病院

森本 佳奈  
京都市児童福祉センター

### 【2回目】

倉持 泉  
埼玉医科大学 総合医療センター  
メンタルクリニック

増田 将人  
福岡大学医学部 精神医学教室

山口 泰成  
奈良県立医科大学 精神医学講座

### 【初回】

西村 有紗  
大阪大学医学部附属病院 卒後教育開発センター

射場 亜希子  
兵庫県立 姫路循環器病センター

大熊 彩子  
医療法人社団翠会 陽和病院

小泉 冬木  
大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

中山 千加良  
京都府立医科大学大学院医学系研究科  
精神機能病態学

中野 温子  
奈良少年院

小川 晴香  
名古屋市立大学大学院医学研究科  
精神・認知・行動医学分野

今川 弘  
東邦大学医療センター大森病院  
精神神経医学講座

家村 智和  
福岡大学医学部 精神神経教室

浅田 遼  
福岡大学医学部 精神医学教室

北岡 淳子  
大阪精神医療センター

俊野 尚彦  
医療法人財団光明会  
明石こころのホスピタル 精神科

## ■海外参加者

Michael Wallies  
Clenia Littenheid AG

Katherine Tan  
Forensicare

Aneta Michalaska  
Department of Psychiatry, Medical University of Warsaw

Athicha Eakamornpan  
Bangkok Mental Health and Rehabilitation Center, Bangkok Hospital

Natee Viravan  
Department of Psychiatry, Siriraj Hospital, Mahidol University

Camille Noël  
Saint-Luc University Hospital & La Petite Maison ACIS

Friya Rachma Putri  
Faculty of Medicine, Universitas Brawijaya & Saiful Anwar  
General Hospital

所属等は2020年2月時点のものです。(敬称略)



# はじめに



19th CADP 運営委員長

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 副理事長

公立豊岡病院組合立 豊岡病院 精神科 安藝 森央

この度は、本報告書にご興味をお持ちいただき、ありがとうございます。

The Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP) は、若手精神科医の教育プログラムとして作成された、2泊3日の合宿形式で行う研修会です。精神科医療に関わる題材を通して、国際学会での発表方法、座長の進行方法、共同研究の申請方法など、多岐にわたる学術的な技術を習得することを目的としています。会期中の進行・議論・質疑応答を全て英語で行うことが特徴です。

第1回CADPは、World Health Organization (WHO) 精神保健部長であったNorman Sartorius先生と、日本精神神経学会理事長であった佐藤光源先生のご指導のもと、世界精神医学会と日本精神神経学会の合同事業として2002年に開催されました。この開催を契機に同年日本若手精神科医の会 (Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO) が発足し、CADPは現在まで毎年開催されています。発足当初のJYPOは任意団体でしたが、健全な運営活動を評価いただき、2008年特定非営利活動法人 (NPO 法人) として認可されました。さらに2016年には認定NPO法人へ昇格をし、今日に至ります。

CADPへの参加は参加者間での強い結束が生まれ、会終了後もメーリングリスト、Social Network Service (SNS)、学会参加等におけるコミュニケーションが続き、その交流は他のJYPO活動、研究活動にも活かされています。また、第7回CADPからは国内のみならず海外からも募集を開始し、毎年世界各国から多くの若手精神科医が参加しており、これまでの海外参加者数は約600名以上にのぼります。

今回の第19回CADPは京都大学国際交流ホールにて2020年2月14日-16日の3日間で行いました。当日は新型コロナウイルス感染が日本でも注目され始めた時期であり、会の開催につきましても幾度も議論した上で、クラスター感染の可能性も最大限に配慮しての開催となりました。全国各地からの国内参加者23名、タイ・インドネシア・スイス・ポーランド・ベルギー・オーストラリアからの海外参加者7名、計30名の若手精神科医が参加しました。初回から毎年CADP全日程に参加いただいているNorman Sartorius先生は長距離移動に伴う感染リスクを憂慮し、ジュネーブのオフィスよりインターネット会議システムにてご参加いただき、というCADP史上初の試みをいたしました。回線の不都合やオーディオシステムの改善は必要で

あったものの、1万キロ近く離れた場所からご指導をいただけるという経験を参加者が得ることができ、医療における新しい学習指導方法とその可能性を感じることができました。Special lectureとして、慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室の岸本泰士郎先生をお招きし、精神医学におけるAI活用や遠隔診療をはじめとした技術と精神医学の融合について講演いただきました。また、横浜市立大学附属市民総合医療センターの青山久美先生には、プレゼンテーションに関する講義を、愛知医科大学・メンタルコンパス株式会社の伊井俊貴先生にはポスタープレゼンテーションについての講義をご担当いただきました。さらに、今回は「JYPOによって得られたものがどう自分の精神科医人生に関わってきたか」をケーススタディ的に理解し、会のあり方を考え直す、という思惑の下、My Career and JYPOというセッションを設け、JYPOのOB、OGでいらっしゃる青山久美先生、伊井俊貴先生、また大阪大学医学系研究科・精神医学教室の藤本美智子先生よりご講演をいただきました。CADP参加経験者である諸先生がたにもアドバイザーとして参加いただきました。ご講演いただいた先生方、お集まりくださった先生方には、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

新型コロナウイルス感染症流行の初期に開催致しましたこの会は、CADPでのインターネット会議など新たな可能性を切り開き、国を超えた交流・指導を行うという経験を得られたことも踏まえ、非常に価値があったものと考えます。幸い、体調不良者やその後の新型コロナウイルスの感染者報告もなく、参加者はその後も臨床業務に携わられていると理解しております。

今回のCADP開催に際して、多くの先生がた、財団、企業より多岐にわたるご支援・ご賛助をいただきました。さらに各参加者の所属元である諸大学・病院・研究機関の先生方におかれましては、CADP参加に際して快く送り出してくださり、誠にありがとうございました。

最後になりましたが、本報告書をお手にとっていただきました皆様に深く御礼申し上げますとともに、お近くにCADP・JYPOに興味をお持ちの方がおられましたら、是非お声掛けいただくと幸いです。JYPOは今後も日本および世界の精神科医療に微力ながら貢献できるよう取り組んでまいりますので、引き続きご指導の程、よろしくお願い申し上げます。

# Introduction of JYPO



認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 理事長  
京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 大矢 希

CADP開催に先立ち、JYPOの活動について紹介した。本内容は、当日は時間の都合で盛り込めなかった内容についても追加して紹介している。

## ■活動理念

JYPOは、若手精神科医が施設や立場を超えて交流することによって、若手世代のレベルアップを図るだけでなく、世界中の若手精神科医との交流を深め、国際的な視野を涵養し、社会全体のメンタルヘルス向上を目指している認定NPO法人である。下記の3つを理念として、理事を中心に会員それぞれが各自のペースで活動に携わっている。

1. 精神医療のリーダーを育む
2. 世界的な視野のもと行動する
3. 社会のメンタルヘルス向上に努める

## ■沿革

### 1. 2002年設立、2008年NPO法人化

JYPOの設立契機は、日本での第1回CADP開催である。Norman Sartorius先生によって開発された教育プログラムであるCADPは、2002年に横浜で開催された第12回世界精神医学会総会(12th World Congress of Psychiatry)に先立って、世界精神医学会(World Psychiatric Association: WPA)と日本精神神経学会(The Japanese Society of Psychiatry and Neurology: JSPN)の合同事業として開催された。JYPO設立の目的は、国際的に活躍できる若手精神科医の研鑽・発展と、大学や研究機関・医療施設などの枠組みを超えた相互交流であり、その精神は今日まで引き継がれている。第1回CADPに参加した30余名の創成期メンバーは、その後、国内外で実施される各種研修会、多施設研



---

究、交流プログラムの実施、各種学会におけるシンポジウム、CADPを始めとする研修プログラムの開催を通じて、JYPOのネットワークを広げていった。

従来の活動を更に発展させ、その成果を社会に還元するため、2008年にNPO法人格を取得した。設立当初から支援いただいている佐藤光源先生（東北大学名誉教授）、Norman Sartorius先生（Association for the Improvement of Mental Health Programs: AIMHP代表）を顧問に迎え、「NPO法人 日本若手精神科医の会」として新たなスタートを切ることとなった。

## 2. 2016年認定NPO法人へ格上げ

NPO法人認証後も、これまで同様に他団体や学会等との連携を強化しながら、社会貢献や公正性を意識する必要がこれまで以上に生じるなかで、活動を続けてきた。こうした活動が評価され、2016年に認定NPO法人として認証された。認定NPO法人制度は、NPO法人のうち、運営組織および事業活動が適正で、特定非営利活動の健全な発展の基盤を有し公益の増進に資すると見込まれる法人に対して、税制上の優遇措置として設けられた制度である。この認証を受け、精神医療の発展などを通じて、より一層公益の増進に寄与できるよう活動を進めていく方針を再確認し、今日に至っている。

2002年の設立以降、JYPOのネットワークは徐々に広がり、現在の若手精神科医会員数は約110名、OB・OGは120名以上となっているほか、多くの賛助会員に支援いただいている。メンバーは、ホームページ、メーリングリスト、学会活動等を通じて活発に情報交換を行っており、全国各地に点在する会員のネットワーク

を活かした活動を続けていく予定である。

## ■メンバーシップ

### 1. 卒後12年以内の若手精神科医会員

JYPOはNPO法人であり、会の趣旨に反しない限り誰もが参加可能である。正会員のうち、次の1)～3)を満たす会員は「若手精神科医会員」と呼ばれる。

- 1) 入会時、卒後12年以内の精神科臨床・研究に携わる医師
- 2) 入会時、精神科臨床経験が10年以内の医師
- 3) JSPN会員

### 2. 6年での“卒業”制度

JYPOは「若手」精神科医の会であり続けるために独自の制度を設けており、若手精神科医会員としての在籍を6年以内とした制度を採用している。この卒業制度によって、会員は常に入れ替わり、経験を積んだ会員が若手の活動を支援しながらさまざまな活動に携わり、以降の活動においてはその若手の会員たちが中心となって運営を行う体制が築かれている。このことにより、若手会員がさまざまな活動に携わることができ、多くの経験を皆で共有することが可能となっている。

## ■主な活動内容

JYPOでは、冒頭に述べた3本柱の理念のもとに活動を行っている。以下、これまでの代表的な活動を紹介する。

### 1. 研修会、ワークショップ

#### ●CADP

JYPOを創設する契機になった研修会であり、今な

---

おJYPOの中で最も重点が置かれているものである。例年2月に開催される当研修会では、精神医学の知識そのものを得ることよりも、学術的な技術や考え方の研鑽に重点が置かれており、Sartorius先生をはじめ、精神医学のさまざまな領域で活躍されているエキスパートから指導いただいている。参加者全員が同じホテルで3日間をともに過ごす合宿形式で行っており、当初から英語でのディスカッションを基本としている。第7回(2008年)からは海外参加者の募集も行っており、毎年多数の応募がある。

初回参加者は英語でのオーラルプレゼンテーション、2回目の参加者はポスタープレゼンテーションが課題となっており、これら以外にもエキスパートによる特別講義や、小グループに分かれてのグループディスカッションといったプログラムで構成されている。

また、会の大きな特徴の1つとして、参加者募集から当日の進行までの、準備・企画・運営に際しても、毎回の運営代表者を中心とした運営委員のメンバーによって行われていることが挙げられる。Sartorius先生の助言を得ながら、プログラムそのものを自らで作っていることも特徴の1つである。CADP最終日には大きな疲労感とともに得も言われぬ充実感を味わうことができ、複数回参加する会員も数多く、当会への参加を契機にJYPOへ入会する方も多い。会の詳細は当報告書をご覧ください。

#### ●臨床疫学ワークショップ

精神医療領域におけるEvidence Based Medicine (EBM)は、昨今ようやく重要性が認識されるようになり、各種ガイドラインも整備されつつある。一方、

EBMを日常診療で実践する際には困難を伴うこともある。JYPOでは過去10年以上にわたって若手精神科医を対象とした臨床疫学ワークショップを年1回開催している。日常臨床においてエビデンスを活かす方法を身につけることを目的とし、論文の批判的吟味、論文検索の方法、統計ソフトを使用した実践演習などのテーマを設定し、講義および実習により構成している。毎年秋頃に実施しており、参加希望の方はホームページ等を参照いただくか、事務局へ日程についてお尋ねいただきたい。

## 2. 研究活動

これまでに述べてきた国内外のネットワークを活かし、多施設共同研究に取り組み、その成果を国内外の専門誌に発表してきた。国際誌への掲載例として下記のようなものが挙げられる。

- 精神科受診経路に関する多施設研究(Pathway研究)  
Fujisawa D et al. Int J Ment Health Syst. 2008
- 精神科Subspecialtyに関する意識調査  
Tateno M et al. Child Adolesc Psychiatry Ment Health. 2009
- 精神科非自発的治療に関する意識調査  
Tateno M et al. Int J Ment Health Syst. 2009
- 精神科医のライフワークバランスとバーンアウトに関する研究  
Umene-Nakano W et al. PLoS One. 2013
- 対人恐怖症：文化結合的診断に関する若手精神科医の視点。  
Nakagami Y et al. Psychiatry Clin Neurosci. 2016.
- 最適な初期研修に関する調査

---

Horinouchi T et al. Acad Psychiatry. 2017

- 自殺予防に関するアプローチ：日本および全国の若手精神科医から

Saito S et al. Psychiatry Clin Neurosci. 2018

その他にも、精神科卒後研究（初期研修に関する意識調査）、精神科卒後研究（専門医制度導入に伴う精神科医の意識調査）、精神医療の地域性に関する調査などを行った実績がある。2013年には日本プライマリ・ケア連合学会若手医師部会と共同して、精神科医とプライマリ・ケア医の精神疾患に関するスティグマに関する調査も行った。現在も複数の研究計画を進行中である。

### 3. 翻訳活動

WPA学会誌であるWorld Psychiatryに関して、2008年より会員有志らによる翻訳活動を介した。2013年よりJYPO内に翻訳委員会を立ち上げ、よりシステマティックかつ継続的に翻訳できる体制を確立し、現在はWorld Psychiatryで出版された全論文の抄録および一部論文の全文翻訳を継続している。翻訳した内容は、JSPNホームページで公開いただいております、どなたでもご覧いただける。また、2013年には、Sartorius先生執筆の書籍である「Fighting for Mental Health」をJYPO会員、OB・OGらで翻訳、「アンチスティグマの精神医学」と題して出版した。さらにWPA関連ガイドライン、the International Classification of Diseases 11th Revision (ICD-11)への改定に向けたフィールド調査の翻訳などを通じて、海外で得られた最新の知見を日本に広めるべく精力的に活動している。

### 4. Mental Health First Aid (MHFA) への協力

メンタルヘルスの問題を有する人に対して、専門家の支援が提供される前に症状を素早く察知し、精神症状の悪化や自殺を予防することは重要なことである。MHFA「こころの応急処置マニュアル」は、専門家による支援の前に提供する精神的な支援に関する、オーストラリアで作成されたマニュアルである。日本では、JYPOのOB・OGメンバーを中心にMental Health First Aid Japan (MHFA-J)を組織化し、マニュアルや教育スライドの翻訳を行っている。そして、研究をベースとすることに重きを置きつつ、日本各地で複数のロールプレイを組み込んだ体験型の研修を多く開催している。JYPOでもMHFAの普及啓発にむけて協力を継続している。

### 5. 国内外の交流

上述の活動以外にも国内外のさまざまな学会において、多施設研究の成果の発表・シンポジウムの開催などを通じて会員相互の交流を深めてきた。JSPN総会は、我々が最も力を入れている学会であり、JYPO会員が中心となって企画したシンポジウムを今までも多数開催してきたほか、JSPN総会で提供されている海外若手精神科医を対象としたfellowship award programに関連して、海外参加者の関わるシンポジウムの運営や懇親会の開催に協力している。彼らの日本での滞在をサポートする役割を担い、海外参加者との交流を密にしており、これを契機にCADPへ参加する海外参加者も数多い。こうした交流は、アジアをはじめとする諸外国の精神医療および文化に触れる貴重な機会であり、我々自身が本邦の精神医療について再考する機会

---

につながっている。JYPO のこうした国内外での活動が認められた結果、優れた精神医療活動の顕彰および精神医療の発展に寄与した団体であるとして、JSPN より精神医療奨励賞を2015年受賞した。

また、学生・初期研修医に精神科の魅力を伝え精神医療への関心を高めてもらうべく、年1回開催されているJSPNサマースクールにおいて、2015年より会員有志による企画の時間をいただき、例年好評を博している。この活動を通して学生や研修医からJYPOへの参加を希望する声が多くあがり、会費無料の「学生会員・研修医会員」を設定するに至った。

さらに、関西、関東、北海道、九州などの地方レベルでの会合も年数回実施している。会員相互の交流のみならず、JYPOについて知ってもらい新たなメンバーに仲間へ加わってもらうべく、症例検討会、CADPの

予行演習、懇親会などを開催している。

### ■ 結語

JYPOに参加することで、キャリアの浅いうちから多くの取り組みに寄与することが可能で、自らが中心となって企画運営する機会も数多い。これからも、精神医療の更なる発展に寄与すべく、多くの方々に仲間として加わっていただきたいと考えている。また、この場を借りて、賛助会員や企業などご支援ご後援いただいている皆様、OB・OGの先生方と、JYPO活動への会員の参加をサポートいただいている会員の所属先の先生方に、今後も変わらぬご協力をお願い申し上げるとともに、日頃のご支援に感謝申し上げます次第である。



# Introduction of Participants

〔報告者〕

福岡大学医学部 精神神経教室 家村 智和

大阪精神医療センター 入來 晃久



## ■ プログラムの内容

CADP初日の冒頭に「Introduction of participants」が行われた。このプログラムは国内外から集まった計34名それぞれが右隣の参加者を他己紹介するという形式で行われた。まず各参加者に10分間の時間が与えられ、前半5分間では自身の左隣の人に自己紹介を行い、後半5分間では右隣の人から自己紹介を受けた。その後、各参加者は自身の右隣の人を全員に紹介した。紹介の仕方や内容等については特別な指定や時間設定はなく、各参加者の裁量に任された。全員の他己紹介が終わった後に、参加者から印象に残った内容等について意見や感想を出し合って議論し、青山久美先生を中心に公の場での他己紹介の仕方についてフィードバックが行われた。以下その内容を簡潔に記す。

## ● 話し方について

氏名は聴衆が聞き取れるように、ゆっくり、はっきりと、正確に発音するように心がける。読み方が難しい場合や発音がわからない場合は十分に確認しておく必要がある。ニックネームがあれば併せて紹介するとよい。各々の座ったままの紹介、立ち上がったの紹介など形式はバラバラではあったが、紹介する相手を立たせるのは失礼となることもあるため注意を要する。メモばかりを注視して下を向いてしまいがちであるが、顔を上げて聴衆を見るようにする。マイクを遠ざけすぎると声が聴衆に届きにくくなるため、適度な距離を保つことが重要である。

## ● 話題について

他己紹介の場合、自分の名前を述べる必要はない。



家族や結婚等のプライベートな話題は注意が必要で、あらかじめ本人に許可を得てから話す必要がある。また、飲酒、ギャンブル等に関する話題は相手の品位を損なうおそれもあり、たとえ相手の同意を得た場合でも、センシティブな内容であるため避ける方が望ましい。日本の文化や流行などを話題にする場合は、他国からの参加者には伝わりにくいことも考えられるため、理解度を確認しながら丁寧に説明をするなどの配慮も必要である。

#### ●聴衆の関心を引く方法について

今回の他己紹介では34人の参加者全員が行うため、一人一人の印象が薄れがちになる。より印象深くするために、その人ならではの事柄に関連する話題を紹介することも効果的である。例えば、「福岡県出身で魚介類の飲食店が好きである」という情報に加え「福岡に行かれた際には、是非〇〇さんに連絡を取ってみてください」と付け加えることで、より親しみやすく記憶に残りやすくなる。

#### ■報告者の感想

冒頭のプログラムであり、初対面の参加者が一同に集まり、緊張感が漂う中で開始した。当初は日本人同士で英語を話すことに、独特の気恥ずかしさを感じていたが、お互いに自己紹介をすることで徐々に場の雰囲気もほぐれ、スムーズにやり取りができるようになった。この他己紹介がCADPで行われる最初の聴衆を前にした英語での発表の場となったが、これが初期の段階で行われた事で「CADPとは一体どんなものなのか?」という報告者の問いに一定の指針を示し、後のプログラムにも抵抗なく参加する事が出来た。発表が一巡した後、フィードバックが行われ、より良いプレゼンテーションスキルを得る機会を冒頭から得られた事は幸運であり、今後の学会発表や初対面でのコミュニケーションの際に、ここで得たスキルを活かしていきたいと感じた。





# How to make a presentation

横浜市立大学附属病院 市民総合医療センター 助教 青山 久美先生



## 【報告者】

福岡大学医学部 精神医学教室 浅田 遼

福岡大学医学部 精神医学教室 増田 将人



このセッションは19th CADPの最初の講義であり、青山久美先生にプレゼンテーションの方法についてご講演頂いた。以下に、ご講演頂いたプレゼンテーションの準備、発表当日についてまとめて報告する。

## ■オーラルプレゼンテーションの準備

### 1. 内容

- プレゼンテーション作成にあたり、なぜこのプレゼンテーションをするのかを考える必要がある
- 最も重要なキーワードは「明確かつ簡潔に (Clear and Simple)」であり、これを念頭において準備を進めていくとよい
- スライドは可能な限りシンプルにすること

### 2. 見やすいスライドのルール

- 暗い背景には白色や黄色の文字を用いる

- 使用する色は3色以下にする
- 離れた場所からでも見やすいようにする (フォントサイズは28以上)
- 1枚のスライドは10秒で内容を理解できるようにする

### 3. 図やグラフ

- 発表に関係のない図やグラフ・写真は用いない
- 図やグラフ・写真を用いたら必ず説明する
- 会場のどの位置にいても見やすいように配慮する
- 1つのグラフにつき使用する線は3本以下にする

### 4. 聴衆への準備

- どのような聴衆を対象としているか、聴衆の知識、ニーズと興味を確認する必要がある
- 「なぜ聴衆はあなたの発表を聴く必要があるのか



---

(Why do they have to listen to you?)」この言葉を常に考えて内容を検討していくと良い

## ■当日の準備

### 1. 会場で確認すること

- 発表する位置
- 発表で用いるパソコンの状態
- 発表前の座長への挨拶(時間の確認を含めて)
- スクリーンで見たときのスライドの明るさや、ポインターの動作
- 会場での見え方(一番後ろからどのように見えるか)
- スライドが見にくい時のためのハンドアウトの準備

### 2. 話し方

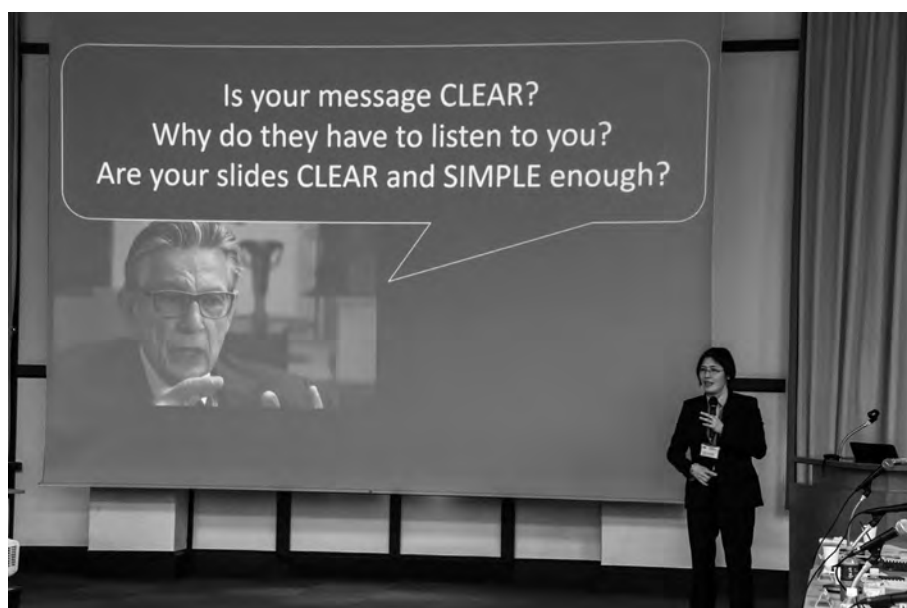
- ボディランゲージと声のトーンが重要である
- ボディランゲージではアイコンタクトや手振りを

意識する

- 話すスピードを遅くすることで内容を強調することができる

## ■報告者の感想

本講義はプレゼンテーションの準備や当日の会場で気を付けることなど、プレゼンテーションのTipsが満載の内容であった。どのような点に気を付けることでより良いプレゼンテーションになるかが、明確となった講義であった。



# Oral presentation session

[報告者]

京都府立医科大学大学院医学研究科 精神機能病態学 中山 千加良  
滋賀医科大学 精神医学講座 角 幸頼



## ■セッションの概要

このセッションでは、初回参加者18名(うち海外参加者6名)が各々事前に準備したパワーポイントスライドを用いて、英語でプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションのテーマについて特に指定はなく、発表者が興味のあること、参加者に伝えたいことなどを自由に選択できた。

初日に2セッション、2日目に3セッションが行われ、1セッション中に3~4名が発表した。各セッションの座長は、2回目以降の参加者が担当した。

1名の持ち時間は5分間で、発表終了後には参加者および青山久美先生からコメントがあった。各セッション終了後には、座長の進行に関して同様にコメントがあった。

参加者は各発表者のプレゼンテーションに対して、評価シートをもとに評価を行った。評価の対象は発表の内容ではなく、スライドの見やすさや分かりやすさ、声の聞き取りやすさ、視線や体の動き、発表時間が守られているかなど、プレゼンテーションのスキルそのものに対するものであった。

## ■青山先生のコメント

各発表者・座長に対する青山先生からのコメントを一部紹介する。

### 1. 発表者に対するコメント

- 座長が最初に自己紹介をするため、再度自己紹介をしない。
- 背景と本文には注意を払い、本文が見にくくならないように色合いや配置を工夫する。
- 専門的な用語や地域特有の話題など聴衆が詳しく知らない可能性がある事柄については、説明が必要である。特に、プレゼンテーションの中で日本語を用いる場合、海外参加者への配慮が必要である。具体的には、その日本語をスペルアウトし、さらにその言葉がどのような意味を持つのか説明する必要がある。
- スライドの写真や図は大きくし、文字は詰めすぎない。



- 
- 情報量が過剰にならないよう注意し、伝える内容を絞る。
  - プレゼンテーションを行う前に、聴衆は何故自分のプレゼンテーションを聞く必要があるのか、理由を明確にする。
  - MRIなどの画像を示す場合、注目すべき点を矢印などでマーキングする。
  - 写真やイラストを載せるときは、内容と関連性のあるものを選択する。表示した写真やイラストについては、必ず説明すること。
  - ポインターを使用する際は、示したい部分だけを指し、みだりに動かさない。
  - 文字などに色を使いすぎず、2色ほどに絞りシンプルにする。
  - スライドの最後にメールアドレスを載せておくと、後日コメントをいただけることもあるため、載せておくのが好ましい。
  - 発表の最後は“*That's all.*”ではなく“*Thank you.*”で終える。

## 2. 座長に対するコメント

- 時間が足りない場合は質問の数を絞り、質問が出ない場合には促していくなど、円滑なセッションの進行を心がける。
- プレゼンテーション終了時には、発表についてのコメントを一言添えると良い。ただし、“*good*”や“*great*”は評価となってしまふ。評価者ではないため、発表者のプレゼンテーションを評価するような表現は避ける。

## ■ 報告者の感想

自身の興味関心のある分野について、各々の発表者が個性を活かした発表をしており、その発表スタイルの多様性に感銘を受けた。また、その後にプレゼンテーションのスキルそのものに焦点を当てて議論をすることで、実践的な知識・スキルを学ぶ貴重な機会となった。初日には他者のプレゼンテーションをどういった点に注目をして評価すればよいか自身の中で曖昧であったのが、回数を経るごとに具体的な指標ができていったことで、この2日間のOral presentationで学んだことの大きさを実感した。また、自身のプレゼンテーション後には学んだ知識をもとに客観的に振り返り、改善点を見つけることができたほか、プレゼンテーション後の議論や最終日に渡された参加者全員からの評価シートにより、様々な視点から自身のプレゼンテーションを見つめなおすことができた。本セッションで得た経験をもとに発表技術の一層の研鑽に繋げていきたい。



# Meet the Expert: Prof. Taishiro Kishimoto

慶応義塾大学医学部精神 神経科学教室 専任講師 岸本 泰士郎先生



[報告者]

京都市児童福祉センター 森本 佳奈



## ■はじめに

CADPでは例年、精神医学の第一線でご活躍される先生方をお招きし、ご自身の活動内容、若手精神科医へのメッセージをこめた特別講演を賜っている。今回お招きした慶應義塾大学精神神経科学教室の岸本泰士郎先生は、先進的な技術を持つ他分野と精神医学との融合によりイノベーションを生み出すことに取り組まれている。また、岸本先生を中心とする研究グループが精神科領域における遠隔診療のためのガイドラインを完成させたことでも馴染み深い先生である。今回のご講演では、遠隔医療との出会いや背景、現在取り組まれている研究と、今後の展望についてお話しくださった。

## ■遠隔医療との出会い

岸本先生は米国に留学中にRAISE studyという初

発エピソード精神病患者の回復についての研究に関わることになり、そこで遠隔医療が取り入れられていることを知り、多くの患者に有用な介入であることを実感された。日本に帰国後は、臨床研究を実行するハードルが近年上昇するとともに、製薬会社主導の脳研究が減少し、新薬の開発が難しくなっているという事態に直面された。そこで、日本でも遠隔医療を取り入れるべく、活動を開始された。

## ■遠隔医療研究の実際

遠隔医療の利点として、遠隔地や被災地で利用でき、在宅医療や引きこもりへの支援に有効であることや延いては、医療格差の是正に繋がることが挙げられる。遠隔医療を推進するために、全国の精神科医によるワーキンググループが作られ、2017年から2018年にかけて日本医療研究開発機構 (Japan Agency for Medical



Research and Development: AMED)の委託研究としてJ-INTEREST (Japanese Initiative for Diagnosis and Treatment Evaluation Research in Telepsychiatry)研究が行われた。この研究により岸本先生は診断や治療の信頼性を調査し、データベースを構築運用し、先述の遠隔医療の医師向け手引書を策定された。研究の具体例としては、ビデオ通話による神経認知評価や、強迫性障害、社交不安障害、パニック障害に対する遠隔CBTなどを被験者に実施されていた。

### ■今後の展望

現在はうつ病患者を対象とした対面評価と遠隔評価の一致率の調査、双極性患者の気分の波を測定するスマートフォンアプリの開発、表情や声の抑揚からうつ病を察知する方法、認知症を早期に診断する機器の開発などに携わっている。また革新的な研究の一つとして、精神医学とメディア解析技術のコラボレーションにより精神疾患を定量化し、早期発見と社会サービスの創出を目指すということが挙げられる。例えば心拍や声の抑揚や表皮の電気信号のデータを集積するウェアラブル端末を作り、AIを利用しストレスや幸福度を定量し「健康経営オフィス」を実現するというものである。その他にも腸脳相関に関する研究など幅広く研究を手がけておられる。

### ■報告者の感想

上述のように、岸本先生のこれまでのご経験を含め、遠隔医療研究を中心にご講演いただいた。筆者の印象では精神疾患は身体疾患と比較して客観的な検査方法が限られており定量化が難しい分野だと思われるが、定量化が可能になれば早期発見だけでなく治療者のスキルに左右されない治療が可能になるかもしれない。講演後の質問では、AIが精神科医に取って代わるのではないかという質問があり、岸本先生も今後AIが精神科医と競合する可能性はあると考えられていた。今後は精神科医含め医師にAIについての学習が必要になってくるのかもしれない。将来の精神科医療について考えさせられる、大変先進的で、刺激的な講義であった。



# Small group work (Day 1): How can you shorten the length of hospitalization of patients with schizophrenia?

Small group work organizers:

滋賀医科大学 精神医学講座 角 幸頼  
京都市児童福祉センター 森本 佳奈  
厚生会 道ノ尾病院 福嶋 翔  
奈良県立医科大学 精神医学講座 山口 泰成  
千葉県精神科医療センター 河岸 嶺将  
札幌医科大学 神経精神医学講座 出利葉 健太

[報告者]

名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学分野 小川 晴香  
厚生会 道ノ尾病院 福嶋 翔



## ■はじめに

Small Group Work (SGW) は、参加者が6グループに分かれ、ある1つのテーマについて3日間かけてグループ毎に課題に取り組むセッションである。今年では“How can you shorten the length of hospitalization of patients with schizophrenia?”というテーマで、統合失調症患者の入院期間を短縮するための市としての解決法を、医学的アドバイザーの立場から市長に提案するというものであった。下記に概要を示す。

## ■セッションの概要

Day1では、統合失調症に対するスティグマが長期入院の原因の1つとなっており、現在も他の先進国と比較すると精神科疾患、特に統合失調症患者の入院が長期化する傾向にあるという本邦の問題点がまず示され

た。そして、市のメンタルヘルスシステムを改善するという目的の下、統合失調症患者の入院期間を短縮するための市レベルでの具体的な計画を作成・提案するという今回のテーマについての説明が行われた。6つのグループのうち、一方(Group 1, 3, 5)は都市部である京都市、もう一方(Group 2, 4, 6)は農村部である但馬地域を想定して計画を作成するよう伝えられた。そのために必要な京都市や但馬地域の人口、年齢別割合、予算、統合失調症の入院患者数とその年齢別割合、精神科の病床数、医師数、グループホームなどを含む医療資源・社会資源についての具体的な数値が情報として与えられた。また、計画を考えるための手がかりとして「地域のサポートを充実させて新規入院者数を減らすための取り組み」、「新規入院患者の入院期間を減らすための取り組み」、「現在の入院患者で症状が改善



した人に地域で住んでもらうための取り組み」、「そうした取組を経て退院した患者の再入院を予防するための取り組み」という4種類のアプローチが示され、これら4つの中から1つをグループ毎に選択して計画を作成することとなった。

3日間のSGWのおおまかな予定について説明がなされ、Day1にプロジェクトのワークシートの作成、Day2に作成したワークシートに基づいて指名された2つのグループによる3分間のプレゼンテーション、Day3に全てのグループがプロジェクトについて4分間のプレゼンテーションを行うことが伝えられた。Day1の具体的な活動として、ワークシートに提示された「プロジェクト名は何か」、「どのアプローチを選択するか」、「プロジェクトの概要と詳細は何か」、「期待できる経済的な効果と予算はいくらか」などの項目についてグループ内で議論を行った。

### ■ 報告者の感想

各グループには1名以上の海外参加者が含まれており、背景の異なる国の参加者の意見を聞き議論するこ



とで、日本の現状について新たな視点から考えることのできるきっかけになった。また、統合失調症患者の入院期間の長期化という大きな社会問題となっているテーマについての議論であり、社会的なアプローチや自身の意見を英語で伝えるのは日常会話以上に難しいと感じた。しかし、グループメンバーが伝えたいことを理解しようと何回も質問をし、作業を分担・協力して進めていく中で、3日間という限られた時間ではあったが、非常にチームワークが高められたように思う。





# Small group work (Day 2): How can you shorten the length of hospitalization of patients with schizophrenia?

[報告者]

奈良少年院 中野 温子

千葉県精神科医療センター 河岸 嶺将



## ■はじめに

このセッションはSmall Group Work (SGW)のDay 2として行われた。まず、都市部である京都市の対策を考えたチームを代表してGroup1が、農村部である但馬地方の対策を考えたチームを代表してGroup6が、ワークシートを基にした各々3分間のプレゼンテーションを行った。その後、それぞれのグループでDay 3の発表に向けてディスカッションを行った。

## ■プレゼンテーションの概要

### Group 1

- 名称: Continuous Education Program (CEP)
- 目標: 退院した患者さんの再入院を防ぐ
- 解決策:
  - 1) 退院前に、看護師が患者さんと家族、ソーシャルワーカーに対し疾病教育を行い退院後の生活に備える
  - 2) 退院後、ソーシャルワーカーが関係者をつなぐ
  - 3) IT技術者の協力を得てウェブ上で啓発を行う
- 期待できる効果:
  - 1) 再入院率の低下
  - 2) 在院日数の短縮
  - 3) 病院スタッフと患者さんの退院への不安の軽減

### Group 6

- 名称: We are together
- 目標: 退院した患者さんの再入院を防ぐ
- 解決策:
  - 1) 但馬地方に3つある精神科病院の近くに自助グループを作る
  - 2) 精神科医、医療スタッフがファシリテーターの役

割を担う

- 3) 患者さんにファシリテーターになってもらう
- 4) ボランティアスタッフをリクルートする

### ●期待できる効果:

- 1) 病院近辺の自助グループの増加
- 2) 再入院率の低下

## ■報告者の感想

資金を獲得してプロジェクトを実現させるために、自治体の首長にプレゼンを行うという設定に斬新さを感じた。普段、コストを意識することがないため、コスト計算は何を基に算出すべきか見当もつかず、難しかったが、税金を予算として使う以上、精神科医療の受益者だけではなく、地域住民の利益や理解も考慮する必要があり、幅広い視点で物を考える貴重なトレーニングができた。

また英語でディスカッションをして短時間で英語のスライドを作成して英語でプレゼンするという、非常にハードルの高いミッションだったが、知恵を出し合えば何とかなるもので、まさに「三人寄れば文殊の智慧」を実感した。



# Small Group Work (Day 3): How can you shorten the length of hospitalization of patients with schizophrenia?

[報告者]

大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 小泉 冬木

札幌医科大学 神経精神医学講座 出利葉 健太



## ■はじめに

3日間にわたって行われるSGWでは、6グループに分かれて、統合失調症を有する患者群の在院日数短縮を試みる方策について討論を行い、予算の獲得を目指した。6グループはそれぞれ都市部(Group 1, 3, 5)および農村部(Group 2, 4, 6)に割り当てられ、各地域における政策を提言した。3日目は、各グループ5分の割当時間のなかで市長団および有権者に対して、各々の政策についてのプレゼンテーションを行い、内容について議論した。下記に各グループの発表内容の概要を記す。

## ■都市部における政策プレゼンテーションの概要

### Group 1

- Theme: Social Worker Specialized for Schizophrenia (SSS)
- Target: 36 Social Workers

ソーシャルワーカーに対する教育を充実させ、彼らを中心として再入院率の低下および早期退院を促すというプロジェクトであった。統合失調症の症状、薬剤



の副作用などに加え、就労支援、患者家族との関係形成、医療福祉施設の情報、などの内容について定期的にワークショップを行うとした。期待される効果として、再入院率の低下、地域の在院日数短縮を挙げた。

### Group 3

- Theme: Kyoto Sanctuary Project
- Target: people with schizophrenia

京都の寺と連携して就労支援を行うことにより、2年後の再入院率を減少させ、さらに京都への観光客の増加という副次効果を期待するプランである。第1段階としていくつかの有名な寺院を募集し、統合失調症に関する教育を実施する。第2段階として、20人の統合失調症患者に1年間その寺院で就労してもらう。第3段階として、寺院が継続雇用するか決めるという内容であった。

### Group 5

- Theme: Kyoto Psychiatrists Education Project (KPEP)
- Target: young people of primary school, junior high, high school

若年者への心理教育の促進、医療従事者による学生への精神疾患教育、小・中・高校など幅広い年齢層に対する教育の拡充を進めていくというプロジェクトであった。第1段階として病院において、医療従事者に対して月1、2回程度メンタルヘルスや統合失調症に関する教育を行うにあたってのノウハウを伝える。第2弾として近隣の高校で月1時間の講義を半年間行う。学生のメンタルヘルスへの理解が深まることにより、ス

ティグマの緩和や地域の受け入れが促進されることが期待される。

## ■農村部における政策プレゼンテーションの概要

### Group 2

- Theme: STORK (Supported Transition Of Regional Knots) project
- Target: long-term hospitalized patient

患者が退院して円滑に地域移行できるような住居の確保を行うプロジェクトであった。6か月以内に病院と地域の支援者や自治体との結びつきを構築し、1年以内に患者や家族に対する啓蒙活動を行い、3年以内に居住施設の建築に着手し、4年以内に施設が完成し、5年目に成果の検証を行う、という5か年計画になっていた。なお、テーマの頭文字であるSTORKは、コウノトリの英名であり、但馬地方で長らく保護活動が継続されていることで有名である。



### Group 4

- Theme: Make members of society
- Target: chronic patients

地域社会への移行を進める企画として3本柱で構成されたプランを提示した。1つ目は住居の準備、2つ目は慢性期患者の退院、3つ目は仕事についてである。1つ目は主に政府が準備し、2つ目は訪問看護を活用して生活の場を病院から地域へ移し、3つ目は主に精神保健福祉士が主体となり、患者の能力に合わせた仕事を提供する。費用見積もりについても、段階ごとに、国からの予算、地域からの予算を区別して行った。

### Group 6

- Theme: We are together project
- Target: schizophrenic patients

統合失調症の患者の再入院を防ぐ目的で、自助グループの創設と運営を中心としたプランを提示した。このプランでは、1年後の自助グループへの参加数を増やすこと、2年後に再入院を減少させることを目的とした。2年間で7280ドルの費用が見積もられた。自助グループへの参加促進によって統合失調症患者の再入院率を減じることにより、運営費用以上の医療費の節約を見込めるとの内容であった。

## ■報告者の感想

統合失調症を有する人々の地域移行の取り組みは喫緊の課題であり、今回の発表のように実際の取り組みを時系列で示し、そこに関わる多職種の連携を具体的に示すことにより、地域移行の段取りのイメージを作りやすくしていると感じられた。5分間という限られ

た時間内で情報を要約し、いかに聴衆に残るプレゼンを行うかということは大変難しいことであるが、目的、対象者、場所、時間を明示することにより効率的に情報を提示することは、聴衆の理解を助け、本セッションの主旨である明快で聴衆のところに響くスライド作りや発表の仕方ができていたと考えられた。

#### ■ 報告書・雑誌編集委員会より:「市長団」からの感想

今回政策提言を受けた市長団からのコメントを下記に掲載する。

また、上記6グループのプレゼンテーションが終了した後、最も説得力のある政策を提示したと評価されたグループ2が予算(景品)を獲得した。

#### ● 安藝市長

限られた時間での計画を作成し予算を獲得するという仕組みのなか、いずれのグループもメンバー間の関係性の構築、議論、まとめを短時間で実行していることが当日のプレゼンテーションのなかで伺い知ることができた。プレゼンテーションの方法については、初日や2日目で議論していたことが反映されていた。惜しむらくは、金銭面における実現可能性に対する呪縛が強いグループが多かったことかもしれない。

#### ● 入来市長

具体的な実行期限を設ける形でのスケジュールを立てることができているグループ、エビデンスや前例を提示することによって実現可能性を想定できるグループには良い印象を持った。限られた時間のなかで、冒頭の挨拶(「多忙な中、時間を設定してくれたことに感謝する」など)があると、審査する側への印象が異なると感じた。一方、行政側としては、事業や政策が成功する具体的なイメージや安心感が欲しかったように思われる。有権者がその予算設定に納得できるほうが、より実行に移しやすいと感じた。

#### ● 佐竹市長

どのグループも内容を吟味したプレゼンテーションで、スライドも見やすいものに仕上がっていた。限られた時間のなかで、基礎的データから結論までを簡潔に提示することは難しいと思われるが、説得力のある内容に仕上がっていた。各グループとも事前準備に苦勞したであろうことが伺えた(※編集委員注:夜更けまで作業に取り組んでいたグループもあった)。



# Online Session with Prof. Sartorius (Day 1, 2)

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP) 代表  
Norman Sartorius 先生

[報告者]

医療法人社団翠会 陽和病院 大熊 彩子

医療法人社団新光会 不知火病院 中野 心介



## ■はじめに

Norman Sartorius先生はCADPの顧問として長年ご参加いただき直接ご指導を頂いていたが、今回は新型コロナウイルスの流行に伴い感染のリスクを鑑みて参加を見送られることとなった。そのため、今回は1日目と2日目にオンライン会議システムであるZoomを使用し、Sartorius先生とCADP参加者をインターネットで結んでの交流が行われた。以下に概略を記す。

## ■Day 1

Zoom接続後、Sartorius先生の姿がメインスクリーンに映し出されると、参加者より歓喜の声が沸き上がった。まず、青山久美先生および大会長より当日行われたプログラムの概要について報告がなされた。次に、海外参加者や初年度の参加者が一人ずつウェブカ

メラの前に立ち、Sartorius先生への自己紹介が行われた。最後はZoom画面上のSartorius先生を交えて集合写真を撮影した。

## ■Day 2

この日参加者は各々の質問にSartorius先生から回答いただくという大変貴重な機会を得た。いくつかの質疑について簡単に記す。

### ●「政策提案」について

今回のSmall Group Work (SGW)でのミッションは「仮想地域における精神科病院の病床数を減らすための政策を市長に提案する」というものであった。翌朝 (Day 3)に控えたSGWの発表に向けて、仮想の「市長」にプレゼンテーションをするにあたり、どのようなこ



とに気をつけるべきかという質問がなされた。これに対し Sartorius 先生は、「誰に発表するかが重要である。その人物が何に興味を持っているかに注意を払う必要がある」と返答された。

#### ●緊張について

前日の oral presentation で大いに緊張してしまった参加者が、緊張をどのように克服すべきかと質問した。これには、「緊張はうまく使えば役立つことができる。私でも発表の前には緊張することがある」という旨を述べられた。

#### ●メンターについて

メンターを選ぶときにはどのようにしたら良いかとの質問には、メンターは複数いることが重要であること、トピックに合わせて相談する人物を考慮することが大切であるとのアドバイスを頂いた。

#### ●社交場面について

最後に、学会のレセプションなど学術的な社交場で何を話したらいいのかわからないとの問いには、自信を持つこと、落ち着いて、相手の言葉を繰り返すことが肝要であると、実践的な助言を頂いた。

#### ■感想

Sartorius 先生は今回来日されなかったものの、インターネットを介したオンライン会議という新しい形態を採用したことは、今後の CADP 全体のあり方に対しても多様な選択肢を生んだのではないかと推測する。先生の鋭いコメントや温かい激励のお言葉に、参加者一同が強いインパクトの残る時間を過ごすこととなった。



# Poster Session and mini-lecture: How to make a poster

The Association for the Improvement of Mental Health Programmes (AIMHP) 代表

Norman Sartorius 先生

メンタルコンパス株式会社 代表取締役 伊井 俊貴先生

[報告者]

大阪精神医療センター 北岡 淳子

奈良県立医科大学 精神医学講座 山口 泰成



## ■はじめに

ポスター発表は、若手医師にとって国際学会での登竜門となることが多く、ポスター作成や発表に関する知識を得ることは非常に重要である。2日目の午後には伊井俊貴先生にポスターセッションの基本についてご講演いただいた。その後、参加者5名(うち海外参加者1名)がそれぞれ英語で2分間の発表を行った。Webで参加して頂いたNorman Sartorius 先生のご指導のもと、ポスターを聴衆に対していかに魅力的に見せるかという面を重視したディスカッションを行った。以下その概要を報告する。

## ■心構え

ポスター発表をするにあたって、まずは発表の目的を明確にする必要があり、テーマや内容は聴衆の知識やレベルに合わせて設定することが望ましい。国際学会などの広い会場では、研究者や臨床家が、数多くのポスターの中で足を止め、読みたくなるようなポスターを作成することが重要である。

ポスターはシンプルな主張を伝えるものであり、1枚のポスターにつき主張は原則1つ、多くても3つまでにとどめるべきである。また、制限時間内で研究の概要をプレゼンテーションする必要があるため、話す内容を絞らなければならない。

## ■全体の構成

- 見やすさ: 2m程度離れていても十

分見えるように文字の大きさは36pt以上にする。

- 色調: 背景色と文字色にはコントラストの強いものを用いる。また色調に統一感を持たせるように心掛ける。赤や黄色の文字は時として見づらくなることもあり、注意が必要である。

## ■内容

- Title: 聴衆を引き付けるために最も大切な部分である。5単語以下もしくは50文字以下の単純なものであることが望ましい。論文と異なり、「○○は効果的なのか?」などと質問形にするのも興味を抱かせる方策の1つであるほか、重要性の提言や、研究の主要な発見をタイトルにするのもよい。Conclusionの内容を用いるのもよいが、その場合Conclusionは重複するため省略してもよい。所属病院や機関のロゴは、カラフルで聴衆の注目を引くようなものであれば、



---

タイトルの下に配置すると効果的である。また参加者から研究に関する質問や問い合わせを受け付けられるよう、E-mailアドレスや電話番号、SNSアカウントを併記するとよいであろう。特にFacebookは参加者との接点を作る上で重要なツールとなる。

- Result: 図や表は1個ないし2個以内に絞り、Main Findingsは一番目につきやすい部分に配置する。
- Conclusion: 聴衆の目につきやすいTitleの下に配置するのもひとつの方策である。簡潔に2行以下にすることが望ましい。

### ■ 発表当日の準備

- ハンドアウトの作成: E-mailアドレスや電話番号、SNSアカウントを載せたハンドアウトをA4用紙に印刷し、聴衆が持ち帰ることができるように準備する。



### ■ 終わりに

国際学会など数多くのポスターがある場所で、自分のポスターに足を止めてもらうことがどれだけ大変なことなのかを理解できた。講演でポスターを魚釣りに例えられていたのが印象深く、魚を釣り上げるためには魅力的なタイトルであることが何よりも大切であることを学んだ。文字の大きさや文体、色調などについて聴衆目線にたった具体的なアドバイスを頂いた。今後ポスター発表を行う際は、これらの点を忘れずに工夫していきたい。





# Special Session: My Career and CADP

大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 藤本 美智子先生  
メンタルコンパス株式会社 伊井 俊貴先生  
横浜市立大学附属病院市民総合医療センター 青山 久美先生

## 【報告者】

医療法人財団光明会 明石こころのホスピタル 精神科 俊野 尚彦  
埼玉医科大学 総合医療センター メンタルクリニック 倉持 泉



## ■はじめに

CADP 2日目の夕方に開催された本プログラムでは、CADPおよびJYPOを卒業し、現在まで精力的にご活躍されている3名の先生方に、CADPで培った経験に基づくご自身のキャリア形成についてご講演頂きました。講演順序に従って以下にその概要を示す。

## ■講演内容

### 1. 大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 藤本 美智子先生



#### ●ご略歴

藤本先生は山口大学医学部を卒業後、同大学大学院へ進学。その後、山口県内の病院に勤務し米国留学を経験された。現在は大阪大学の医学系研究科精神医学教室にて臨床と統合失調症の研究に従事されている。

#### ●講演内容

導入ではCADPでのNorman Sartorius先生とJYPO

メンバーとの出会いについてお話しいただき、次いでJYPOに関連する国際交流活動および学術活動としての日韓若手精神科医による合同研修会、国際学会への参加、海外でのJYPOメンバーとの再会などについて解説していただいた。また、米国留学の期間でCADPを通じて培われた国際交流の経験や人脈が非常に有用であったことを示された。最後に、現在取り組んでおられる統合失調症患者の眼球運動の研究についてご紹介いただいた。

### 2. メンタルコンパス株式会社 伊井 俊貴先生



#### ●ご略歴

伊井先生は富山大学医学部を卒業後、名古屋市立大学および南生協病院等にて臨床に従事。また、同大学院に進学されカウンセリングの研究に取り組みされた。現在はメンタルコンパス株式会社の



代表取締役役に就任し、LINEを使用したメンタルトレーニングアプリの開発や企業および法人へのメンタルヘルスサービスの提供などを行っている。

#### ●講演内容

導入部分でCan you control your brain?というメッセージをもとにアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) の要素を盛り込んだ問題提起があった。

次いで、ご自身のCADPとJYPO理事としてのご経験に基づいたJYPOにおける4段階のカリキュラムの紹介をされた。初年度は英語でのプレゼンテーション、その後は経験年数にあわせてカンファレンスのマネジメント、組織 (JYPO) のマネジメントというように、年次を経ることに主体的かつ能動的な取り組みへと役割をシフトし、経験を積むことができる体制が作られている。これらの経験は、ご自身の精神科医としての人生をより良い方向へ変えるきっかけとなったことを示された。また、現在行われている会社事業の主軸となるACTに関連した取り組みなどもご紹介いただいた。

### 3. 横浜市立大学附属病院

市民総合医療センター

青山 久美先生



#### ●ご略歴

青山先生は横浜市立大学医学部を卒業後、同大学病院等にて臨床経験を積まれた。その後は同大学大学院へ進学。せりがや病院 (現、神奈川県立精神医療センター) において依存症治療に従事し、現在は横浜市立大学附属病院市民総合医療センターにて児童および依

存症治療専門で診療に従事されている。

#### ●講演内容

組織の運営のために、時間と労力を使うことをどう考えるかという内容から講演が始まった。結婚や育児・介護などのライフイベントや環境の変化など、やるべき事が山ほどある状況を、実際にご自身がどう乗り切ってきたかを示された。限られた時間で多くのことをこなしていくためには、優先順位をどうつけるかが重要であり、先生の経験をもとに例を挙げて説明された。青山先生が大切にしていることは、第一に家族、次いで健康、臨床、教育といった順であった。多忙な中でも時間と労力を捻出し、JYPO運営に参加することで得られたものは、幅広い視野、スキル向上、そして何よりも一生涯の人と人との繋がりであり、これらはご自身のキャリア形成にとって大きな助けとなっており、非常に意義深いものであるとお話しされた。特に社会的な繋がり形成・維持はCADPの参加を通して強化されているとのことであった。



## ■終わりに

今回はCADP及びJYPOを卒業された3名の先生方からCADPを通したキャリア形成についてご講演頂いた。三者三様のキャリアを歩まれており興味深い話を伺う事が出来た。

3名の先生に共通していることは、多忙な中でも主体的にJYPOの活動に取り組んでこられたこと、そしてその経験と豊富な人脈をご自身の人生に様々な形で活かされていることであった。さらに、エネルギッシュな講演から聴衆を引き付ける卓越したプレゼンテーションスキルを肌で感じる事ができた。

今回のCADPで培われたスキルはもちろん、参加者同士のつながり、すなわち「ご縁」は参加者全員の生涯を通じた財産になるだろう。そして今後も、この「ご縁」を通じた活動をもとに、CADPはさらなる発展をしていくであろうと大いに感じた。



# How to be elected

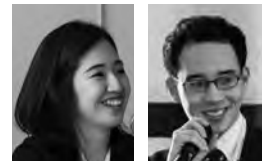
横浜市立大学附属病院市民総合医療センター 助教 青山 久美先生



[報告者]

大阪大学医学部附属病院 卒後教育開発センター 西村 有紗

大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室 佐竹 祐人



## ■はじめに

3日目最初の本プログラムは、「組織の理事への立候補の仕方」について学ぶものであった。まず2名の参加者による「架空の委員会（例えば、地域の若手精神科医の会）の理事への立候補」を想定した1分半～2分の所信表明演説がなされた後、どちらの立候補者を選ぶか、またスピーチの良かった点や改善点について議論した。その後、青山久美先生より立候補の準備、所信表明演説の仕方、そして質問への回答の方法についてご講演頂いた。

## ■ Volunteer speech

### 1. Katherine Tan先生

一人目のTan先生は聴衆の真ん中に立ち笑顔で身振り手振りを交えて堂々と語りかけた。また用意していたメモをほとんど見ずにしっかりと全員の顔を見つめて話すスピーチであった。会場からは、

- 笑顔で語りかけるスピーチで、演説者をより身近に感じ安心するスピーチだった。
- 緊張しているようであったが、それをうまくコントロールできていた。

といった意見が挙がった。

### 2. Micheal Wallies先生

二人目のWallies先生は演説台に立ち、ゆっくりとした口調でのスピーチであった。笑顔というよりは真剣な面持ちで、Tan先生と比較すると淡々としていた。会場からは、

- ゆっくりとした口調でとても聞き取りやすかった。
- 聴衆から距離を置き、落ち着いた口調で話すスピー

チは、“solid”で信頼感を与えるものだった。といった意見が挙がった。

## ■ Lecture “How to be elected”

### 1. 準備段階で考慮すべきこと

- 選出されて幸せかどうか。
- 自分が役を全うするにあたって十分に健康であるかどうか。
- 過去のリーダーたちがどういったことをしてきたか。
- 投票者の要望はなにか。
- 演説会場の環境はどうなっているか。（見えやすさやマイクの有無など）

### 2. 所信表明の内容について

- 聴衆の持つ知識と、自分の知識の共通項を意識する。
- 立候補する地位の重要性を認めるところから始める。
- 自分が要件を満たしているかどうかをできるだけ謙虚に述べる。
- 投票者の要望に応じて、選出されたら何をしていくかを述べる。
- 将来的なビジョンを述べる。

### 3. 所信表明時のマナーについて

- 注意を引いてしまうような服は避ける。
- ゆっくりだが情熱をもって話す。
- しっかりと立ち、動きすぎない。
- 聴衆とのアイコンタクトを取りながら話す。
- 笑顔で話す。

- 防衛的なボディランゲージを使わない。
- 他の候補者を悪く言わない。
- メインメッセージを最初に述べ、それをプレゼンの途中と最後に繰り返す。

#### 4. ABC technique

質問に答える上での回答の「型」である ABC technique について学んだ。

Acknowledgement (理解を示し)、Bridge (話題の焦点をずらし)、Communication (伝えたいことを補強する説明を行う) というものである。Small Group Work Day2での質問を例に出しての解説が行われた。

#### ■ 報告者の感想

参加者によるスピーチはとても刺激的なものであった。まずその勇氣に心を打たれ、そして二人の対照的でそれぞれ違った良さのあるスピーチを聞くと、選ぶことと選ばれることの難しさを実感した。何かに立候補し投票される、という経験は日常ではめったにないことだと思う。だが、規模を小さく考えてみると治療方針や研究内容の提案など、立案し評価される場面はたくさんある。今回学んだテクニックはそういった場面でも生かすことができるものであった。また自らスピーチを買って出た参加者は、私よりももっと学ぶことの多いプログラムだったのではないかと思う。またこのような機会があればスピーチを志願し、今回のレクチャーを生かした演説を試してみたいと思った。



# Ferewell Session : “Go-en” Project 2020

[報告者]

東邦大学医療センター大森病院 精神神経医学講座 今川 弘

大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室 佐竹 祐人



## ■はじめに

このセッションでは、大会長および副大会長から“Go-en Project 2020”というプロジェクトの提案と、実行に向けたグループワークが行われた。下に概要を示す。

## ■概要

19th CADPも無事に最終日を迎えた。3日間の密なプログラムや懇親会を通し、我々各地から集った参加者は深い絆を築き上げることが出来た。しかし、この貴重な「ご縁」も、CADP終了後となると、相互の物理的距離等の問題により、どうしても関係性の継続に困難が生じてしまう。“Go-en Project 2020”はCADPで作上げた絆を今後も保持し、深めていくためにそのネットワークを利用した何らかのプロジェクトを生み出すことを目標に掲げた。我々は具体的にどのようなプロジェクトをCADP終了後も行っていきたいかということについて、参加者同士で議論し、意見を出し合うこととなった。

## ■グループワーク

### 1. 概要

最初に Small Group Work の6グループをグループ1とグループ4、グループ2とグループ5、グループ3とグループ6の3グループに分けた。それぞれグループごとにCADP参加者のネットワークを築き上げるためのアイデアを15分間話し合った後、次

にそれぞれのグループごとに出された案を3分間で発表した。

### 2. 発表

グループ1とグループ4からは①写真をシェアすることで、近況報告を行う、②本CADPで用いたオンライン会議システムであるZoomを使用し、定期的にオンライン上の勉強会を開催する、③CADP以外の学会や、各国の若手精神科医の組織 (European Federation of Psychiatric Trainees等) に関する情報共有、という案が出た。学術内容や学会情報等を共有し合うことは、互いに学術的に高め合う有益なネットワークを築き上げることができると考えられた。

グループ2とグループ5からは① World Psychiatry Association等の国際学会における最新トピック、症例報告等の医療関連情報の共有、②ヨガや食生活等、そ



---

それぞれの国における文化の違いの共有、という案が出た。医療関連のみならず、非医療的な日常文化の共有も行うこと、すなわち仕事とプライベートの両面での情報交換を続けていくことで、互いの絆がより深められると考えられた。

グループ3とグループ6からは①近況報告を積極的に行う、②それぞれの仕事場の紹介や、生活場所における観光情報の共有、という案が出た。参加者それぞれの地域情報を公開しあうことで、互いの文化を共有するのみならず、今後その地域に来訪する際の助けにもなり、参加者間の異文化交流をより活性化させることができると考えられた。

### 3. まとめ

3グループからの意見が共有された後、19th CADP 参加者用の Facebook グループ、“19th CADP

PARTICIPANTS COMMUNITY”の紹介とグループへの参加の奨励があった。その場でグループに参加する人も多く、大会終了後も Facebook 上で医療、プライベートの両面から活発な情報交換がなされることが予想された。

#### ■ 報告者の感想

世界各地からの若手精神科医が一同に会し、懇親会やグループワークを通して医療と非医療の両側面から密にコミュニケーションをとれる機会というものは、CADP 以外ではなかなか無いだろう。その貴重な絆を如何に絶やさず継続していくかといった本プロジェクトの主旨はとても有益かつ重要であると感じた。19th CADP で得たかけがえのない体験を今後も参加者同士で共有し合い、互いに成長していきたいと思う。



# Evaluation of the 19th CADP and Future Prospects for the 20th

[報告者]

兵庫県立 姫路循環器病センター 射場 亜希子  
公立豊岡病院組合立 豊岡病院 安藝 森央



## ■プログラムの概要

19th CADPを締めくくるプログラムとして、参加者による振り返りの場が設けられた。海外参加者、初回参加者、複数回参加者のグループに分かれて、率直な意見を出し合った。その後、各グループで話し合われた内容を発表し、全体で意見の共有を行った。

## ■良かった点

どのグループからも、新型コロナウイルス感染症の影響で様々な調整が必要だったにも関わらず、講師、運営の先生方の尽力により充実した3日間の日程を終えることができたことへの感謝の意が述べられた。

国外の参加者からは運営側の丁寧な連絡や対応により快適に過ごすことができた、魅力的なプログラムであった、Reception Dinnerでの出し物は楽しかった、などの感想が述べられた。

初回参加者からはLectureが非常に実践的であった、Small Group Work (SGW) で議論する中で様々な意見を聞くことができた、など各プログラムを通じてたくさんの学びを得ることができ、非常に満足度の高いプログラムであった旨が述べられた。また、運営側の配慮により大きな遅延なくプログラムが進行したこと、SGWの課題提出の時間を23時とすることで密度の濃い議論を集中しておこなうことができたことが挙げられた。

複数回参加者からは、Norman

Sartorius先生とのOnline Sessionという新しい試みを通じて、Onlineを用いた交流はCADP regional meeting等でも活用できる可能性があるとの指摘があった。

## ■改善しうる点

会場に電源や無線LAN等の設備がなかったこと、会場と宿泊施設と距離があり集合時間が早かったことなどハード面での課題が指摘された。密度の高いプログラム構成であるため、SGWで課題作成の時間が短かったこと、昼食時間に余裕がなかったなど、プログラムの質・量と時間のバランスをとることの難しさが指摘された。

また、Introduction of participantsでの他己紹介の方法が分かりにくいいため事前に説明用紙を配るとよりスムーズではないか、移動時にはぐれるなど不測の事態





のために緊急連絡先を明示したほうがよいのではないかといった提案がなされた。

### ■ 報告者の感想

参加者全員が活発に意見を述べ、互いの意見を引き出そうと議論することで、CADPの改善の可能性を模索していた。その姿勢はCADP及び参加者のさらなる発展・成長を期待させるものであった。

直前に様々な決断・変更を余儀なくされたにも関わらず、CADPを盛会のうちに終えることができたのは、運営・参加者が一丸となり、より良い時間を作りたいという強い熱意と互いに感謝し尊重する姿勢によるものだと実感できる、とても温かい振り返りの時間となった。



# Remarks from the overseas participants

## **Aneta Michalska**先生 Medical University of Warsaw



As a first-time participant, I was both grateful and surprised that my application for 19th CADP had been accepted. I was the second psychiatrist from Poland in the history of this course. Thanks to the kind and thorough e-mails from the organizing committee I was not anxious.

Myself and other participants spent three days in Kyoto exchanging our experience, talking about our jobs and simply having fun. During the conference everyone was very kind and I am glad that I could meet all those fascinating people. I think that the most important benefit of attending CADP was the possibility to meet young psychiatrists from all over the world and hopefully keep in touch and collaborate during our future careers.

I enjoyed learning new things about personal and professional interests of the participants, as well as the culture of Japan, Thailand, Indonesia, Australia, Belgium and Switzerland. It was also a great chance to visit Japan. Although I spent there only a week, I am even more fascinated by this great country (so different from my own) and I will make sure to come back.

But let's not forget about one of the aims of CADP, which was academic development. I admit that I was sad (but a little less nervous about my oral presentation) when I found out that Professor Sartorius would not be able to attend. However, JYPO dealt with his absence perfectly. I learned a lot from Dr. Kumi Aoyama's lecture "How to Make a Presentation" and her insightful comments. From now on, I will quote her as an expert on oral presentations.

## **Athicha Eakamornpan**先生 Bangkok Mental Health and Rehabilitation Center, Bangkok Hospital



Attending the 19th CADP is one of the precious moments in my life. I heard about this program years ago and didn't reluctantly apply after becoming psychiatrist. I didn't get accepted on the first time, so I guess second time is the lucky one, and surely it is. This year, I believe, turned out to be one of the most challenging and difficult course in term of both the organizers and participants. I really appreciated all the effort and dedication that the committee put to make this year course happened, despite all the difficulties from the COVID-19 situation. Even without Professor Norman Sartorius's presence, all the speakers' contents and the course itself were still very interesting and useful. Participating in oral presentation, small group discussion and observing other activities really gave me refreshing energy and passion to become better psychiatrist. In another way, having the opportunities to talk and exchange opinions with other participants, work-related or even personal matters, made me see a lot of new and wider aspects of balancing our lives. And also, I didn't expect this, but there are a lot of fun-packed activities from the committees, thumbs up for them.

After the course ended, the global situation of COVID-19 is getting worse every day. I want to use this opportunity to express sympathy and hope that every country will stand together, in order to prevent the spreading and control the damage from the infection. Let's hope that next year program, we will gather together again in Japan and celebrate the COVID-free world.

---

## Camille Noël先生

### Saint Luc University Hospital and La Petite Maison ACIS

As a second time overseas participant from Belgium, I very much enjoyed CADP, for its friendship aspect as well as for its obvious academic and professional quality and interest.

Indeed, I was glad to meet again nice people whom I met at last CADP and JSPN fellowship award programme. It was nice to find again their positive spirit and open-mindedness.

It is moving to see that participants from all over Japan, from North to South, from East to West, gather altogether in this meeting. Souvenirs they bring from all parts of Japan are also touching. For us overseas participants, what an incredible and wonderful opportunity to meet Japanese colleagues from all over Japan!

I enjoyed the participant's interesting presentations and it was nice to see that all endeavoured to attentively and actively provide constructive comments for presenters to enhance their skills. I had the chance to receive insightful and precious comments from Professor Sartorius (through remote connection) and from the participants, that very much help me improve my next posters. I believe that all participants felt encouraged and enhanced.

The programme is very professional and well organised. The atmosphere was very friendly, open minded and positive. The reception parties were incredibly funny, creative and surprising. I am very happy to have connected with such nice people. So, despite the coronavirus period, we had good human connection. In that respect, the very professional statement about coronavirus that we received before CADP made me perfectly confident. All participants were very welcoming, overseas participants were very well cared for and I felt perfectly comfortable and at home. It is nice to experience that cultural differences are easily overcome thanks to our common ground, psychiatry. This common reference and area of interest enables us to exchange about our experiences as easily as with people of one's own cultural background.

I appreciate the GO-EN project, a constructive initiative aimed to maintain connection and collaboration between participants after CADP. With JYPO and Michael from Switzerland, we chatted about perspectives of connexion between JYPO and overseas residents' organizations (European Federation of Psychiatric Trainees and World Network of Psychiatric Trainees). Michael and I were glad to imagine that JYPO's and CADP's positive, constructive and motivated spirit could connect with other positively minded psychiatrists from overseas and then contribute to shaping together the future of psychiatry.

After CAPD, back to our respective work environments, CADP remains something we can lean on, that gives us courage to believe in our dreams and values, helps not let ourselves be only overwhelmed by busy everyday worklife and reminds us that we should go on pursuing our values and dreams.

I hope we keep connecting and collaborating with each other and I wish JYPO and CADP participants good luck for their projects.



---

## Michael Wallies 先生

### Clenia Littenheid AG



Within Europe Switzerland is considered by some to be the “Japan of the European Continent”. This is comprehensible because Switzerland and Japan share similar values: for example, accuracy, precision, commitment and perfection in what they do. Being invited to participate in the 19th CADP I can confirm that my Japanese colleagues who organized this event truly put all their dedication into this project. Being responsible for organizing similar, though smaller events in my home country Switzerland I realized what an amazing job they did under toughest conditions enabling young and striving psychiatric trainees, helping them become better psychiatrists.

But why do we need better psychiatrists? What is our role in medicine and more important, in society? Considering the emerging covid-19 disease short before and during the course I wondered about the role psychiatrists play in the 21st Century and in time of crisis.

I found the answer to this question at the CADP for I realized through the participation how diverse our work is. Being a psychiatrist means to have a unique set of skills which other medical professionals do not have. Needless to say, that our work consists of much more than just talking to a patient. We need to grasp and understand and analyze very complicated situations that our patients are facing and often enough find solutions where others were not able to see a way to help anymore.

Since our field of work is so complex and challenging it is of vital importance that we learn how to communicate and present our work to fellow researchers and colleagues around the world. During the 19th CADP I learned an extremely valuable set of skills, ranging from how to do a proper presentation, which is easy to understand for colleagues and patients, to teamworking and collaborating skills across the continents. I cannot value high enough what an excellent program the CADP is. Through its unique mode of allowing multiple participations and challenging the participants gradually more on each level, one can truly master a big step in becoming an excellent psychiatrist.

I am very grateful for the effort and high quality of the CADP-Team and the insight into the Japanese culture. I would like to learn and collaborate more in the future.

## Natee Viravan 先生

### Faculty of Medicine Siriraj Hospital and Mahidol University



Participation in the Course for Academic Development of Psychiatrists (19th CADP) at Kyoto was an unforgettable experiences. Being one of the participants in this program was a great opportunity for me. I have learned a lot of important skills which will be useful for my career. Many wonderful friendships were also started here. Despite only 3 days in Kyoto, this great time will always last in my memory.

On the first day of my arrival at Kyoto, I was impressed by a really warm welcome party. Everyone was so nice and friendly.

I was also surprised by everyday parties because I had never joined parties this often. However, every evening events that was held were impressive. The party staffs have great senses of humor and were good entertainers. Moreover, games that we played together and friendly talking with each other made those nights

---

unforgettable.

In those 3-day program, I have learned a lot of useful skills including introducing other person, oral presentation, poster presentation, moderating the session, working in a small group. Every comments from participants and commentators made me grow up and see which points in me that I can improve. This learning environment was excellent in my opinion. Moreover, those snacks from all over Japan that were provided at the corner of the room were delicious and helped me participate in the program delightfully and attentively. I really appreciate it. The online session with Prof. Sartorius was also impressive. Thank you very much for the staff team that worked so hard, though many obstacles that had to deal with.

Besides those knowledges and skills, the other valuable thing that I got from CADP was friendship. Although we came from different countries, it did not make me feel distant from everyone here. I could feel the warm and friendly atmosphere. I knew lots of new Japanese friends and those from other countries including Belgium, Switzerland, Australia, Poland, and Indonesia which I believe we will meet again someday. Those wonderful time will be kept in my heart.

Even though this year program has finished, our friendships will never end. I hope for our future collaborations. Please keep our contacts and make our connections stronger. I will used those knowledges that I have learned in the course and further develop my skills. I believe we will meet again one day. Thank you for those wonderful moments. See you again.



# Sartorius Award for Best Presenter and Award for Outstanding Presenter in 19th CADP

CADPでは、参加者全員より Oral Presentation と Poster Presentation の評価スコアが付けられ、最終日にそれぞれの Best Presenter が発表される。

19th CADPでは、Best Presenterの他に Outstanding Presenter を新設し、18名の Oral Presenter と5名の Poster Presenterの中から、下記の4名が選ばれた。



■ Sartorius Award for Best Oral Presentation

西村 有紗

(大阪大学医学部附属病院)



■ Sartorius Award for Best Poster Presentation

増田 将人

(福岡大学医学部 精神医学教室)



■ Award for Outstanding Oral Presentation

北岡 淳子

(大阪精神医療センター)



■ Award for Outstanding Poster Presentation

倉持 泉

(埼玉医科大学総合医療センター)

# 20th CADPのご案内

20th CADPは、下記の要綱にて開催を予定しております。

この報告書を読まれてCADPに興味をもたれた先生方、是非ともご参加いただけますと幸いです。

正式な募集は9月頃から行う予定としており、全国の医学部精神医学教室や研究機関などにご案内を送付するほかJYPOホームページ (<http://www.jypo.org>) にも随時情報を掲載していきますのでご参照ください。

また、参加者だけでなく、20th CADPの準備、運営に携わってくださる方も募集しています。

ご興味をお持ちの方、ご質問がおありの方は事務局までお問い合わせください。

日 程: 2021年2月11日(木・祝)午後～13日(土)夕方

場 所: マイステイズ新浦安コンファレンスセンター

〒279-0014 千葉県浦安市明海2-1-4 電話047-709-1600

<https://www.mystays.com/hotel-mystays-shin-urayasu-cc-chiba/>

講 師: Norman Sartorius先生他、海外および国内講師数名

募集時期: 2020年9月～10月(予定)

募集人数: 約35名(海外参加を含む)

※新型コロナウイルス感染症流行の収束や対策等がなされ、他医学系学術集會も同時期に開催される状況であれば、上記予定通りの開催とさせていただきますが、情勢次第では延期および中止も検討されます。予めご了承くださいませ、お願い申し上げます。また開催中の感染防止対策につきましては、後日、JYPOホームページ内にてご案内申し上げますので、そちらよりご確認ください。

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 (Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO)

20th CADP 運営委員長 佐竹 祐人 (大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室)

お問い合わせ先: 認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 (JYPO) 事務局

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町1-9-2

株式会社メセナフィールドアークス内

E-mail: [jypo@mecenat-net.co.jp](mailto:jypo@mecenat-net.co.jp) TEL: 03-5651-7105 FAX: 03-5651-7106

# JYPO 参加募集案内

## 認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会に参加しませんか？

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 (Certified NPO-JYPO) では、新しいメンバーの参加をお待ちしております。

### ■ JYPO とは

本会は、精神科医療の専門性を確立し、精神科医療に必要とされる教育研修を提供し、さらに精神科医療の発展に資する研究の促進のための活動を行い、国内外の精神科医との情報交換や啓発活動を行い、もって日本国内及び各国で生活する精神疾患をもつ人達、その家族、さらには地域のニーズに応える精神科医を普及させることを目的としております。

### ■ 会員の特典

- ① 本会の開催する研修会や会合に参加できます。
- ② メーリングリストへの加入ができます。
- ③ 臨床・研究・教育など、多岐にわたる若手向けの有用な情報が得られます。

### ■ 正会員 (入会金 3,000 円、年会費 5,000 円 / 入会期間: 6 年間)

#### ● 若手精神科医会員

卒後 12 年以内の精神科臨床・研究に関わる医師であること / 日本精神神経学会の会員であること

#### ● 学生会員: 日本の医学部医学科に在籍していること

#### ● 研修医会員: 日本で初期臨床研修中であること

- \* 学生、研修医会員の方は、年会費が無料となります。
- \* また、学生・研修医会員の在籍期間は 6 年間に含みません。

### ■ 賛助会員 (入会金 5,000 円、年会費 一口 10,000 円)

本会の目的に賛同、援助をしていただける、個人、企業、または団体様

### ■ 申し込み方法

#### ① オンラインによるお申込み

JYPO ホームページより、オンラインにて入会をお申し込みいただくことも可能です。

\* JYPO ホームページ: (<http://www.jypo.org>)

\* ご入会についてのページより会員申込画面へお進みいただき、必要事項を記入のうえお申込みください。

#### ② FAX によるお申込み

JYPO ホームページから入会申込書をダウンロードしていただき、必要事項をご記入のうえ、FAX にて事務局までお送りください。 \* 次のページの申込書を記入いただく形でも可能です。

### 〈お問い合わせ先〉

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 (JYPO) 事務局

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町 1-9-2

株式会社メセナフィールドアークス内

E-mail: [jypo@mecenat-net.co.jp](mailto:jypo@mecenat-net.co.jp) TEL: 03-5651-7105 FAX: 03-5651-7106



## 認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会 入会申込書(正会員)

年 月 日

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会

理事長 宛

認定特定非営利活動法人 日本若手精神科医の会会則に賛同して入会を希望し、正会員として入会を申し込みます。入会が決定しましたら、会則に従います。

氏名 ふりがな	
生年月日(西暦)	年 月 日
現住所 ふりがな	
Tel/Fax	
E-mail	
勤務先 ふりがな	
勤務先住所	
勤務先Tel/Fax	
学歴	年卒業
医師免許取得年月日	年 月 日
職歴・研究歴	
JYPOのことを どこで知りましたか?	
入会の動機や今後JYPOで 行いたい事を教えて下さい。	
専門分野・興味のある分野	

.....

理事長承認年月日 令和 年 月 日

## 協 賛

### 後援および協賛団体 (2020年3月31日現在)

本会開催にあたり、多くの皆様からご後援およびご協賛いただきました。  
ご支援・ご協力心より感謝申し上げます。

#### ■ 後援団体

ウェルビー株式会社 Welbe, Inc.  
株式会社麻生 ASO CORPORATION  
アステラス製薬株式会社 Astellas Pharma Inc.  
エーザイ株式会社 Eisai Co.,Ltd.  
大塚製薬株式会社 Otsuka Pharmaceutical Co., Ltd.  
武田薬品工業株式会社 Takeda Pharmaceutical Company Limited.  
第一三共株式会社 DAIICHI SANKYO COMPANY, LIMITED  
大日本住友製薬株式会社 Sumitomo Dainippon Pharma Co., Ltd.  
株式会社ツムラ TSUMURA & CO.  
日本イーライリリー株式会社 Eli Lilly Japan K.K.  
Meiji Seika ファルマ株式会社 Meiji Seika Pharma Co.,Ltd.  
ヤンセンファーマ株式会社 Janssen Pharmaceutical K.K.  
ゆう薬局グループ U YAKKYOKU GROUP.  
ルンドベック・ジャパン株式会社 HLundbeck A/S  
ファイザー株式会社 Pfizer Japan Inc.

(順不同、敬称略)

#### ■ 共催

京都大学大学院医学研究科

## 運営委員

#### ■ 運営委員長

安藝 森央(公立豊岡病院組合立 豊岡病院)

#### ■ 副運営委員長

入來 晃久(大阪精神医療センター)

佐竹 祐人(大阪大学大学院医学系研究科 精神医学教室)

#### ■ 運営委員

〈海外担当〉

出利葉 健太(札幌医科大学)

〈国内担当〉

中野 心介(医療法人社団新光会 不知火病院)

河岸 嶺将(千葉県精神科医療センター)

〈スモールグループワーク担当〉

角 幸頼(滋賀医科大学 精神医学講座)

森本 佳奈(京都市児童福祉センター)

福嶋 翔(厚生会 道ノ尾病院)

山口 泰成(奈良県立医科大学 精神医学講座)

〈レセプション担当〉

倉持 泉(埼玉医科大学総合医療センター)

発行日 2020年0月00日

編集者 報告書・雑誌編集委員会:大矢 希/佐藤 明/濱本 妙子/出利葉 健太/今川 弘

CADP運営委員会:安藝 森央/入來 晃久/佐竹 祐人

制作者 株式会社メセナフィールドアークス

第19回CADP報告書における著作権と個人情報 は JYPO に 帰 属 し ます。



抗精神病薬

劇薬、処方箋医薬品  
注意—医師等の処方箋により使用すること

**レキサルティ**<sup>®</sup> 錠 1mg  
錠 2mg

REXULTI<sup>®</sup> tablets (ブレクスピプラゾール錠)

薬価基準収載

◇効能・効果、用法・用量、禁忌を含む使用上の注意及び用法・用量に関連する使用上の注意等は、添付文書  
をご参照ください。

製造販売元  
**大塚製薬株式会社**  
Otsuka 東京都千代田区神田司町2-9

文献請求先及び問い合わせ先  
大塚製薬株式会社 医薬情報センター  
〒108-8242 東京都港区港南2-16-4 品川グランドセントラルタワー

〈20.01作成〉

明日をもっとすこやかに

**meiji**



ノルアドレナリン・セロトニン作動性抗うつ剤  
劇薬、処方箋医薬品<sup>注)</sup>

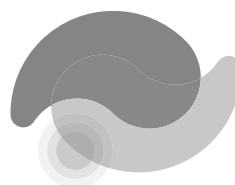
薬価基準収載

**リフレックス<sup>®</sup>錠15mg・30mg**

REFLEX<sup>®</sup> TABLETS 15mg・30mg

ミルタザピン錠

注) 注意-医師等の処方箋により使用すること



抗精神病剤

劇薬 処方箋医薬品(注意-医師等の処方箋により使用すること)

薬価基準収載

**シクレスト<sup>®</sup>舌下錠**  
5mg・10mg

SYCREST<sup>®</sup> SUBLINGUAL TABLETS 5mg・10mg

アセナピンマレイン酸塩舌下錠

注) 注意-医師等の処方箋により使用すること

※「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」、「効能・効果に関連する使用上の注意」、「用法・用量に関連する使用上の注意」等、詳細は製品添付文書をご参照ください。

[資料請求先]

**Meiji Seika ファルマ株式会社**

東京都中央区京橋 2-4-16

<https://www.meiji-seika-pharma.co.jp/>

くすり相談室 電話(0120)093-396、(03)3273-3539

FAX(03)3272-2438

作成：2018.9



hvc  
human health care



## 患者様の想いを見つめて、 薬は生まれる。

顕微鏡を覗く日も、薬をお届けする日も、見つめています。  
病気とたたかう人の、言葉にできない痛みや不安。生きることへの希望。  
私たちは、医師のように普段からお会いすることはできませんが、  
そのぶん、患者様の想いにまっすぐ向き合っていたいと思います。  
治療を続けるその人を、勇気づける存在であるために。  
病気を見つめるだけでなく、想いを見つめて、薬は生まれる。  
「ヒューマン・ヘルスケア」。それが、私たちの原点です。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ



エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。



大日本住友製薬

●効能又は効果、用法及び用量、禁忌を含む使用上の  
注意等については、添付文書をご参照ください。

セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害剤(SNRI) 薬価基準収載

# ∞ イフェクサー<sup>®</sup> SR カプセル

37.5 mg・75 mg

EFFEXOR<sup>®</sup> SR CAPSULES

ベンラファキシン塩酸塩徐放性カプセル

劇薬 処方箋医薬品

注意—医師等の処方箋により使用すること

製造販売元

ファイザー株式会社

〒151-8589 東京都渋谷区代々木3-22-7

文献請求先及び問い合わせ先：製品情報センター

プロモーション提携

大日本住友製薬株式会社


〒541-0045 大阪市中央区道修町 2-6-8

文献請求先及び問い合わせ先：くすり情報センター

EFX72F024F  
P03988v02

2019年10月作成



販売元(資料請求先)  
 **第一三共株式会社**  
 東京都中央区日本橋本町3-5-1

 **ドライシロップ**  
 10%新発売

 **点滴静注200mg**  
 新発売

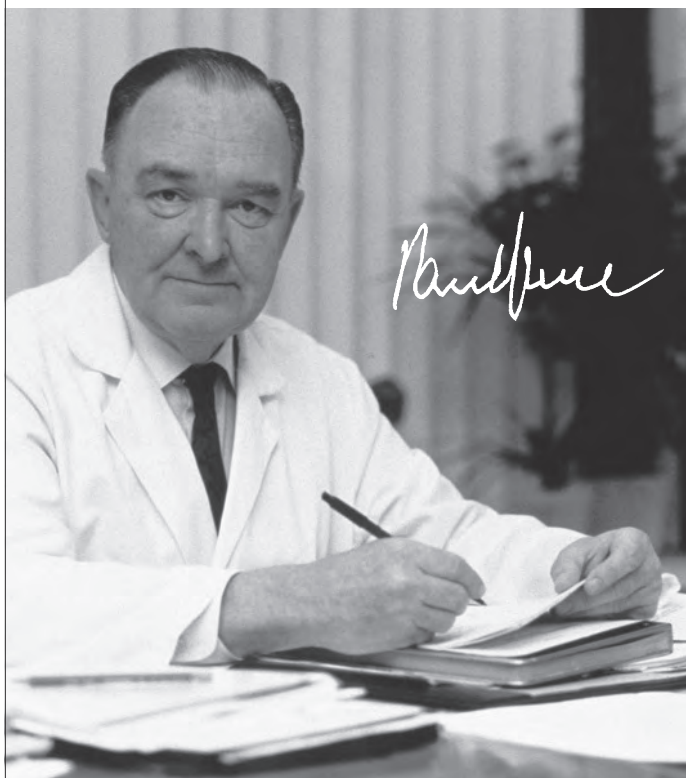
抗てんかん剤 薬価基準収載  
**VIMPAT® ビムパット®** 錠 50mg 100mg  
 ドライシロップ10%  
 点滴静注 200mg

劇薬、処方箋医薬品：注意—医師等の処方箋により使用すること  
 一般名/ラコサミド(Lacosamide)

●「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等については添付文書をご参照ください。

 製造販売元  
**ユーシービー・ジャパン株式会社**  
 東京都新宿区西新宿8丁目17番1号


2019年3月作成



ポール・ヤンセン博士(1926-2003)  
 基礎・臨床薬理学における数々の功績が認められ、多くの化学賞を受けている。

**Janssen**  
PHARMACEUTICAL COMPANIES OF  
**Johnson & Johnson**

抗精神病剤 劇薬 処方箋医薬品\*  
 **インヴェガ®** 錠 3mg  
 INVEGA® Tablets 6mg  
9mg  
パリエドリン徐放錠 薬価基準収載  
 \*注意—医師等の処方箋により使用すること

持効性抗精神病剤 劇薬 処方箋医薬品\*  
 **ゼプリオン®** 水懸筋注 25mg  
 XEPLION® Aqueous Suspension for IM Injection 50mg  
75mg  
100mg  
150mg シリンジ  
パリエドリンパルミチン酸エステル持効性懸濁注射液 薬価基準収載  
 \*注意—医師等の処方箋により使用すること

「効能・効果」、「用法・用量」、「禁忌を含む使用上の注意」等は製品添付文書をご参照ください。

製造販売元(資料請求先)  
**ヤンセンファーマ株式会社**  
 〒101-0065 東京都千代田区西神田3-5-2  
[www.janssen.com/japan](http://www.janssen.com/japan)  
[www.janssenpro.jp](http://www.janssenpro.jp) (医薬品情報)

© Janssen Pharmaceutical K.K. 2015-2018

2018年4月作成

私たちは常に  
“3つのゆう”を心がけ、  
地域の皆さまから愛される  
“なじみの薬局”を目指します。

ゆう薬局の「ゆう」には、  
YOU(あなたに)・優(やさしく)・友(フレンドリー)でありたい  
という3つの意味が込められています。  
患者さまやご家族さま、地域医療に携わる方々はもちろんのこと、  
スタッフ間においてもこの思いやりの心を忘れずに、  
ゆう薬局から地域社会へ優しさの輪を広げてまいります。

ゆう薬局グループ **95** 店舗  
京都府内:93店舗 京都府外:2店舗

[www.uno-upd.co.jp](http://www.uno-upd.co.jp)

  
**ゆう薬局**  
SINCE 1950 KYOTO



## 精神・神経疾患をもつ人々のために

人が未来への希望や夢を持つことは、生きていく上でとても大切。  
けれど今日を乗りきることに精一杯の人たちもいます。  
私たちは、そんな苦しむ患者さんの1秒、1分、1日を支えたい。  
「プログレス・イン・マインド」の理念を持って、患者さんとそのご家族の  
より良い生活のために寄り添って前進し続けるルンドベック。  
今日を明日へつなぐために、70年以上にわたり  
精神・神経領域で革新的な治療薬の開発に情熱を注いでいます。  
これからも、少しずつ重ねる歩みの先の、未来を目指して。

PROGRESS  
IN MIND

**ルンドベック・ジャパン株式会社**

〒105-0001 東京都港区虎ノ門五丁目1番4号 東都ビル7階

LuJ-A5-201908



## 編集後記

今年も無事にCADP報告書を発行することができました。執筆いただいた参加者の皆様、本報告書の発行に際してサポートいただいた多くの方々に感謝申し上げます。

今回のCADPは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行の徴候を踏まえ、Sartorius先生が来日を急遽見送られることとなった中での開催でした。開催時点の2月中旬は、大型クルーズ船が横浜に停留していた時期ではあったものの、会場すぐそばで京都マラソンが予定通り実施される等、国内情勢に変化はありませんでした。しかし、その後の世界各国における感染者数の急激な増加、WHOによるパンデミック宣言、国際線の急激な減便、各首長による外出・イベントの自粛要請が続いたのは皆様もご承知の通りです。

まずは、このたびCOVID-19に罹患された方々には謹んでお見舞い申し上げますとともに、一日も早いご快復を心よりお祈り申し上げます。

一方で、連日の様々な関連ニュースの報道、一部の日用品が大量に買い占められた結果として空棚が目立つ薬局やスーパーの光景を目の当たりにすると、否が応でも不安な気持ちを感じざる得ないところです。また、感染症病床への転用やスタッフの配置転換等といった話も聞こえてきており、心理的・社会的・経済的な影響の大きさを感じずにはられません。個人の不安と社会の不安が渦巻くこのご時世、市民、患者、医療従事者、行政関係者など、世の全ての人に何らかの形でメンタルヘルスの専門家としてサポートする必要があることは言うまでもなく、日々の自身の行動について改めて考えさせられます。

本報告書が皆様のお手元に届く頃の世情は現時点では予測困難ではありますが、一日も早い事態収束への願いをこめて、編集後記とさせていただきます。

2020年4月吉日 大矢 希 (JYPO報告書・雑誌編集委員長/理事長)